

四、人は變るが仕事は續く

十年一昔。十年は永いものです。

丹那トンネルは實際に工事にかつたのが大正七年四月一日ですから、貫通までには十六年——正確に云へば十五年三月月——一昔半以上の時が経つたのであります。併し熱海線の計畫に着手したのは、明治四十四年ですから、其れ以前に熱海線としては十年近くの壽命があつた譯です。この長い間の事ですから熱海線の仕事、丹那トンネルの仕事に従事した人も随分よく變りました。第一役所の所屬からして轉々としたものです。

第一に熱海線の仕事をなすべくお役所はどこから始まつたか、熱海線は先づ最初は明治四十四年四月廿一日に鐵道院時代の中部鐵道管理局の所管として生れたわけです。そして此の中間時代は大正二年五月十二日までつゞきました。此の間まる二年一ヶ月です。次が大正二年五月十三日から六月二日まで、此の間僅に二十一日間です。この廿一日間は本院の技術部に籍を置いたのですが、それは中部鐵道管理局にあつて、此の仕事の采配を振つて居られた古川阪次郎氏が、本院の技術部長に榮轉されましたときに、仕事も一緒に、一時本院の技術部に持ち込まれたのです。

大正二年六月三日からは東京改良事務所に籍が變りましたが、此の時代は大正四年六月二十二日まで、まる二年間續いて、大正四年六月二十三日に、初めて本式に獨立して、熱海線建設事務所が生れました。

四、人は變るが仕事は續く

この事務所は全く熱海線の建設、つまり箱根線改良の使命を負ふて生れたものですから、もう熱海線も外に引つばられることもなく、今日まで同一事務所のもとに連綿として工事が続けられたのであります。尤も事務所の所在地は本院の中から新橋に移り、東京を去つて小田原に移轉し、關東震災後は更に西下して現在の熱海までやつて來ました。そして事務所名も伊東線の工事をやる關係から、熱海線の線をとつて今日の熱海建設事務所となりました。かうして所管があつちこつちに、くつゝいたり離れたりしてゐる間にも、仕事は着々進められて居つたのであります。尤も此の間、大正二年、第一次山本内閣が政友會に依つて組閣せられ、原敬氏が内務大臣に床次竹二郎氏が鐵道院總裁になられて、所謂建主改從主義からと云ふわけなのでせう、熱海線の仕事は一時中止の運命に會ひました。併し大正三年、第三次大隈内閣の時に仙石貢氏が總裁となられ、加ふるに副總裁に古川阪次郎氏が居られたので熱海線も再び浮び上る事になりました。床次總裁の時代も中止とは云ひますけれど、熱海線を全然積極的に放棄したのではありません。だから此の時代の一年許りは、まあ研究時代とも云ふべきものでせう。

事務上の所屬もさる事ながら、實際丹那トンネルを掘り始めてからの責任者の移動も可なりに、はげしいものです。如何に役所の仕事の一つ仕上がる迄に、多くの人手に渡るかと謂ふことがわかります。大正七年にトンネルを掘り始めた當初の責任者は、熱海線建設事務所の富田保一郎技師であります。事務所長としても第一代であります。それから今日迄十六年間に青木勇、中村謙一、楠田九郎、池原英治、川口愛太郎、竹股一郎、平山復二郎技師まで八代を経て居ります。つまり平均二年で變つてゐる事になりますが、初代の富田所長、五代の池原所長は既

に故人です。又現場にあつて、直接仕事を専門に擔任してゐる熱海、大竹兩口の工事主任も之に劣らず度々交替しました。又大正九年から昭和六年迄は、丹那トンネル工事を受けもつ熱海、大竹兩詰所以外に、トンネル工事以外の熱海線工事をも總括擔任する派出所が兩口に設置されて居りました。派出所主任は熱海が、竹股一郎、池原英治、星野茂樹、樋口操、岡野精之助技師と五人、大竹が同様、片桐嘉晴、宮本保、星野茂樹、岡野精之助、橋本哲三郎技師と五人代つて居ります。又詰所主任は熱海が箕浦戒二、高井信一、高井長次郎(高井信一氏嚴父)、高橋重作、伊藤孝治、福島龍八氏から現在の有馬宏技師まで七人、大竹が片桐嘉晴、橋本哲三郎氏から現在の石川九五技師まで三人代つて居ります。併し現場の方はそこに連續勤務したものがあつて、其の人が多く順次責任の位置に立ちましたから、結局實質からは所長程の變動とはならなかつたのであります。

併し此の頻繁の交迭を請負人側の者に比較しますと、誠に極端な對照となります。熱海口の鐵道工業は初め二年位に二人變りましたが、三代目からは一寸も變らずに連續十五年、大竹口の鹿島組は今日まで初めから全く變らずに働き通して居ります。これには役所とは自ら異なる事情がありますが、其の忍耐強い勤続の功績は大に感謝すべきものだと思います。

これらの勤續者は、熱海口が頭の田中仙太郎氏と工事係の前田恭助氏、三島口が頭の櫻井金作氏と工事係の栗田政治氏、塚本季次郎氏とであります。尤も昨年になつて櫻井氏は榮轉して栗田氏が其の後をついで居ります。

今日請負者側の者に會つて、時々昔話が出ますと、古い時代の役所の者の面白いエピソードを聞かれますが、

監督者が變る度毎に意見が違つて困つたことも能く出る話の一つです。此の十六年の間同じ仕事をやりながら、役所側と請負者側との移動状態を對照して見ますと、色々のことを考へさせられます。

尙直接工事には關係しませんでした。本省の幹部として、工事着手後、其の計畫遂行に盡力され、色々の點から關係の深かつた技術者に大村錦太郎、八田嘉明、太田圓三、久保田敬一、橋本敬之、池田嘉六、黒河内四郎、河原直文の諸氏があります。

着手當初トンネルが未だ難工事に這入らない時代には、關係の技術者めいめいが、其のもつて居る經驗から、工事上につき屢々意見を異にし、直接工事を擔當する者が、其の爲困つたこともありましたが、大正十三年頃、トンネルが愈々丹那式の難工事時代には入り、今迄吾々のもつて居つた經驗では、どうにも出来なくなつてからは、自然かう謂ふ空氣も解消してしまひました。十六年の間に随分多くの人が入れ變つた譯ですが、此のトンネルを貫かうと云ふ信念には、少しのゆるぎもなかつたのでありまして、今日の成功も要するに、この一貫した精神に依り結ばれた協同の成果であります。